特集・アジアの都市と横浜❺

東南アジアの都市をどう見るか

矢野　暢

一――東南アジアの〈まち〉と〈むら〉
二――《セントロイド》の都市性
三――「外力」による都市形成
四――歴史的カタストロフィ

一――東南アジアへの〈まち〉と〈むら〉

まず、ごく基礎的なところから議論をはじめていこう。それは、東南アジアにおいては、〈まち〉と〈むら〉とはそもそもどういう論理的関係にあるのか、ということである。世の中どこでも、〈むら〉があれば〈まち〉があり、あるいは〈むら〉がやがて大きくなって〈まち〉をつくる、というわけではないのである。

まずあらかじめ、これからここで実証しようとしている仮説みたいなものをかいつまんで書いておくことにしよう。それはこういうことである。

東南アジアのばあい、たしかに村落は自成的な単位としてうまく説明できる。ところが、ある村落が、あるいはいくつかの村落がリンクしあってつくられるネットワークの結節点が、質的に転換して〈まち〉的なものになる、という筋道がどうしても実証できない。東南アジアの都市形成論の専門家ポール・ホイートリィが都市形成を「自成的」「他成的」のふたつにわけているが、その含みは東南アジアの都市形成は多分に他成的だということなのである。他成的な都市形成がなされるようなところではどういう国家形成の筋道が考えられるのだろうか。いわゆる封建制的歴史背景から生み出される「近代国家」のようなものは生成しうるのか。そういうところにできる「国家」はまともなものなのかどうか。

東南アジアについてもっとも理論的なかたちで「都市性（アーバニズム）」について考えてみせたのは、いましがたあげたポール・ホイートリィという学者である。かれはいくつかのすぐれた仕事をしているが、この「都市性」ということばを定義するのにひじょうに苦慮しており、かれの理論のなかには、聞きなれない表現だが、《セントロイド》（「中心点」とでも訳すか）ということばも出てくる。つまり継続的な人口移動の結集点、中心点というのが、どうやらかれの「都市性」概念の核心であるかのようである。

また一九六一年に、ジョン・フリードマンという学者がべつのおもしろい定義をしている。これは「効果的空間（イフェクティブ・スペース）」というモチーフ、つまりなんらかの社会形成上の効果をともな

った空間の創造主こそが、都市的セクターであるという考え方である。

いずれにしても、なにが東南アジアの「都市性」であるかということについては、この地域の都市研究をまったくないがしろにしてきた内外の学界で、まだきちんとした定義があるわけではない。けれども、ホイートリィの理論のなかでなによりも重要なのは、東南アジアのばあい、「都市化」には二つの範疇があるという指摘である。ひとつは、「他成的都市形成（urban imposition）」であるという。つまり、都市性をそとからおしつけられ、内在的論理では都市が出てこないケースのことである。それにたいして、もうひとつ「自成的都市形成（urban generation）」というのがあって、これは内在的発展の論理によって都市が自生的に出てくるケースである。こちらのほうはわかりやすい。

わたしのさしあたっての結論的感触をいえば、東南アジアについては「他成的都市形成」を説明するのはやさしいけれども、「自成的都市形成」を説明するのはひじょうにむつかしいということである。そのことをめぐるさまざまな問題をいまから解きほぐしていくわけだが、そのまえに肝心な事柄について触れておかねばならない。それは、〈むら〉の問題、あるいは基礎的生態空間の問題である。つまり、都市性をいずれまというる素地をもったごく基礎的な人口生態空間のことである。

東南アジア世界は、本質的に〈むら〉の世界である。いいかえれば、農業適地における自然発生的社会生態の世界である。そのことはたしかだが、ただ、そこでの〈むら〉の論理自体ひと筋縄ではいかないほど複雑なのである。京都大学での同僚である坪内良博教授によると、東南アジア農村の特徴は分離型増殖ないしヒドラ型増殖をみせること、すなわち適地において増殖し、容易に分離独立あるいは消滅をみせることであるという。わかりやすくいうと、〈むら〉はある適地にできる。しかもそこで閉鎖的な村落共同体をつくるのではなく、自由自在にべつの適地に飛び村をつくり、タンポポの種のように四方八方に拡がりうるのである。

わたし自身、かつて南タイの農村を素材に「派生村形成の論理」ということについて書いたことがある。わたしが南タイで発見したある村は、ひとつの核心的な集落からその後およそ百年ほどのあいだに三代におよんで派生村が分離し、いまでは母集落から九〇キロ離れたところまで子集落が飛んでいる、という形状をもっていた。こういうばあい、飛んで別れたひとつひとつの集落をつかまえてそれぞれ〈むら〉というだけではだめで、いわばひとつのネットワークを形成している複数の村落の因縁関係を〈むら〉ととらえたがいい面もあるのだ。そのばあい、だいじなことは、ひとつひとつの村がなかなか大きくならないし、だから簡単に〈まち〉ができるわけではないということである。

こういうところでは、村落の存在形態に全体として興味深い傾向が生ずる。それは、坪内教授の表現を借りると、一、まばら（Sparsity）二、多様さ（diversity）三、相対的独立（relative independence）という三つの特徴としてとらえることができる。こういう三つの特徴からいえることは、東南アジアにおいては、人口の基本的単位はきわめて小さく、そこには絶望的なまでの分断状況があるということである。この事実は都市形成の可能性との関連では、かなり意味深長なことである。

二――《セントロイド》の都市性

さて、なんらかの「適地」に人間が棲息し、そこになんらかの社会空間ないし政治的生態空間をつくりあげたとき、それがいったいどのような共同体的本質をもつのかということは、東南アジアの現実においてはなかなか定義できないのである。さきほどホイートリィが《セントロイド（中心点）》という表現を用いているということを書いたが、なにが《セントロイド》かということはわかったとしても、ある地点にできた

《セントロイド》をとらえて、これが〈むら〉であるのかそれとも〈まち〉であるのかを截然と定めるのは実にむつかしい。

極端なことをいえば、その《セントロイド》が〈むら〉でもあると同時に〈まち〉でもあるし、あるいは〈むら〉ないし〈まち〉でありながら同時に〈くに〉でもある。といえるような状態すら発生しうるのである。そういうぐあいに、概念の限界状況がすこぶるあいまいなのが東南アジア社会の特徴であるといえる。基本的にはそこが問題なのであって、いわば定義、そして意味論的吟味の問題が、あらゆる《セントロイド》ないし「都市」的現象にしつこくつきまとうのが東南アジアの特徴なのである。

にもかかわらず、現実にバンコクがあり、ジャカルタがある。マニラもあれば、シンガポールもある。こういう歴然とした大都会、そしてそこを満たしている典型的な「都市性」はどういう歴史的経過からして出てきたものなのか。そこで、ここでの議論の筋道に即して、まったくまばらで分断された人口生態空間の歴史的現実から、どういう条件があってそういう「都市性」が生じたのかを、理論的に考えてみないといけないということになる。

たしかにホイートリィは、結論的に、東南アジアでは「自成的都市形成」が困難だといっている。だが、かりに一歩さがって自成的な都市形成がありうると仮定したとしよう。そのばあい、つまり日本のように、社会内的事由によって城下町、門前町、宿場町などが形成されたのとおなじぐあいに都市形成がなされるとしたばあい、理屈のうえではまず、複数の村落を結ぶ結節点（ノーダル・ポイント）のようなものが形成されねばならないということになる。

その観点から東南アジアをみていくと、たしかに潜在的な「都市性」をもった結節点がなかったわけではない。東南アジアの各地にみられる定期市がそうだし、あるいは巨大な寺院も各地に建造され、信心深いひとびとの心を引きつけている。しかし、定期市は、おおむね村落と対抗する存在ではなく、むしろ個々の〈むら〉の主権性を強めるほうが多い。また寺院の所在する《セントロイド》にしても、それが〈むら〉ではなく〈まち〉であるということは決定的にはいえないのである。後者のばあい、〈むら〉が〈むら〉的特性をそっくりそのまま残したまま肥大化していることがありうる。ちょっとみには〈まち〉にみえるけれどもしょせん〈むら〉であるという事例は、東南アジアをあまねく満たしているのである。

たしかに、ある結節点（ノーダル・ポイント）が〈まち〉になったという事例はなくはない。しかし、〈むら〉が自己肥大を遂げて〈まち〉的外観を装ったというばあい以外に、純然たる〈まち〉が発生したというときには、それなりの特殊な社会力学が働いているということになる。結節点がすべて〈まち〉になりうるのなら、もっとたくさんの都市形成をみていなくてはならないのに、実はそのなり方がひじょうに偶然的である。つまり、必らずなんらかの外的な力の導入によってそうなっているという事実に立ちいたるのである。つまり、東南アジア社会では、人口凝集の結節点がすなわち潜在的都市である、という一般的法則化はできないということである。

けっきょく、結節点と都市形成との関係が必然的に説明できないかぎりは、やはり東南アジアにおける都市形成は、かなりの度合他成的であるというホイートリィの結論を認めないといけないということになる。そして、かりに他成的都市形成が東南アジアにおける都市化現象の主要なパターンであるとするなら、ここでわたしたちは「外力」という概念を導入しなくてはならなくなってくる。「外力」、すなわちそとから働き、あるいはそとからもち込まれ、現地のさまざまな社会的要素を動員したり、またそれに便乗したりして現地において、都市形成をうながす力ないし契機である。ときには、現地のことにまったく無とん着に「都市性」をもちこむことさえある。そこのところをこれから考えてみよ

う。

三――「外力」による都市形成

東南アジア世界のばあい、どのような「外力」が都市形成をもたらしたのだろうか。

一般的にいって、「外力」とは、東南アジア社会においてなんらかの人口凝集地点、すなわちここでいう結節点、に都市本質を付与した外来の物理的、文化的な力、ととらえることができる。いい方を変えると、「外力」とは都市本質を現地に導入し、それを特定結節点に付与する外部的な力といってもいい。ただ、都市本質の付与ということにもこれまた二つの意味がありえて、ひとつは具体的な都市らしいものをつくりだす物理的創造の局面、もうひとつはある地点に外部から都市あるいは国家という定義を与える、つまりそういう定義づけをする意味賦与の局面、との二つである。

それから、「外力」について意識しておくべきもうひとつのポイントは、それ自体がそうとう多種多様にわかれるということである。ひとつひとつの「外力」の事例について、都市本質を付与するやり方はどうであったかということをかなり緻密につめてみないといけない。ヒンドゥイズムとイスラムとで「外力」による他成的都市形成の態様はまったくちがうし、また中国起源の「外力」のばあいでも、ベトナムにおける中国型都市形成のばあいと、朝貢都市国家の成立のばあいとでは全然ちがう。それからヨーロッパの植民地支配においても、フランス、イギリス、オランダあるいはスペインのばあい、それぞれちがっている。「外力」による都市本質の付与のされ方が多彩であること自体東南アジア世界の多様な特質をつくったひとつの要因として重要だということである。

ここで、歴史的に現象化したいくつかの「外力」について簡単に検討を加えておくことにしよう。

まずヒンドゥイズムのばあいである。これは、いわゆる「内陸型神聖都市」というものをつくりだしたが、基本的には先住者の有無と無関係にある地点にモニュメントが建てられ、その周辺部の民がその外来的モニュメントのまわりで政治的に組織されていくというかたちで形成されている。そして、その政治的な組織化が形成するのは、必ずしもたんなる居住空間ではなく、なんらかの意味での政治空間である。従来の一般的な見方とは合致しない見解ではあるが、ヒンドゥによる都市形成のばあい実はかなり閉鎖的な政治空間をつくったのではないかという見方に心ひかれている。モニュメント中心の政治空間というのは、小さな都市国家的ユニット、つまり「国家」と呼称されうべき本質をもった都市的な人口クラスターであった、という見方は、意外に検討に値する仮説だという気がしてならない。つまり、クメール帝国というふうな広がりの支配をあまり素直に事実として認めてしまうのは危険だということである。

つぎに、中国文化という「外力」によるばあい、さきほどベトナムにみられた各種の都市形成と、朝貢都市国家とにわけなければならないと指摘したが、とくにこの「朝貢」のケースが微妙な問題をはらんでいる。「朝貢」というのは、いわば中国側の一方的な利害関心事項である。中国側の関心にもとづいて、「朝貢」都市国家の数は増減している。つぎになにが「国家」であるかということは中国側が法的に定めているということ、つまり、そこに中国的先入観がかぶさっているということである。第三に、朝貢関係は中国側の事情によってひじょうに不安定なものであったということもいえる。要するに、「朝貢」都市国家のばあいは、偶然的に記録された現象であって、都市形成そのものとは直接には関係がないということがいえるだろう。

中国起源の「外力」による都市形成の問題としては、ベトナムの城、舗、市のこと、あるいは東南アジア各地にみられる華僑都市のことなどもあるが、ここでは立ち入らないでおこう。

「外力」の第三のカテゴリーとし

てイスラム化があげられる。イスラムが東南アジアの各地に沿岸型交易都市とでもいうべきものをつくりあげたことはよく知られている。このばあい、ヒンドゥとちがってモニュメント建設も必須不可欠の条件とはしないで、むしろ、人と人との関わりを求めるかたちの、いわばアンチ・モニュメント主義であっただろうといえる。と同時に、ヒンドゥがすでに定着していたところにイスラムがはいることによって、ヒンドゥ特有の宇宙論的形而上学がかなり稀薄化され、政治・経済現象の世俗化が生じることになる。それよりも、イスラムの都市形成のばあいだいじな点は、人口がある程度凝集する現地の「結節点」、つまり、土着的ネットワークの重要な結節点を、一点だけでなく複数地点そのまま受けいれて政治的、経済的拠点として強化していくということである。そのことによって、イスラムのばあい、多元的に都市化現象が生じることになる。それはべつの論理でいうと、「小型家産制国家」の多元的発生現象としてとらえられるのである。

最後に、都市形成をもたらした「外力」のなかで、いちばん大きなものは植民地支配であった。そこで東南アジアにおけるヨーロッパ人のつくった「植民都市」というものを議論しないといけないわけである。たとえば初期のバタビアやマニラなどが参考になるが、周知の事柄なのでここでは立ち入ることは、控えよう。

四――歴史的カタストロフィ

いよいよ、議論をしめくくらなくてはならなくなった。そこで、議論を現代の東南アジア像にもっていくことにしよう。

〈まち〉と〈むら〉の問題についても、ひとによっては近代化ということを、いわば予定調和的に考えるかもしれない。つまり、さまざまな社会経済的な要因によって、〈まち〉と〈むら〉をむすぶネットワークが発達し、そこで「近代国家」を生むにふさわしい土壌が形成されるという考え方である。こなれない表現を用いていうなら、「プロト＝モダン・ステート」がじわじわ形成されていくという考え方である。

理屈のうえでは、「プロト＝モダン・ステート」というものは、五つの特徴をもつことになるだろう。ひとつは領域国家の観念、つまり国家は地域的拡がりを支配するという観念が定着していく。第二に、ほぼ全国的な言語的＝文化的意思疎通のネットワークが形成されていく。三番目は、古い時代の都市国家にまつわる不安定な特徴が変質し、点として所在する国家という面が稀薄になっていく。四番目に、「外力」によってつくられた大都会（プライメート・シティ）が土着化、内在化していき、揺るぎなき存在となって中枢機能をはたらきはじめる。またほかの拠点に副次的都市化が生じるかもしれない。そしてもうひとつ、政治的正統性原理の近代化ということがある。

ところが、困ったことに、歴史の展開はそうスムースにはいかないのである。むしろ、そういう合理的な説明ないし筋書きから逸脱したような不自然な歴史的飛躍が生じがちである。ということは、東南アジアの伝統的な〈まち〉と〈むら〉、あるいは〈まち〉と〈くに〉との意味連関をめぐって、歴史のある段階で画期的な現象が発生するということである。

東南アジア社会が秘めていた固有の論理構造が崩されて、まったくどうも説明のつかないような現象が急激に生ずる状況、これはいわば「カタストロフィ」ととらえたほうがいいような状況的本質をもっている。

なかでも、わたしがことのほか気になるのは、首都の問題である。専門的に、首都のプライマシー（優位性）の強化といってもいい。かつて植民地支配などの「外力」によって大都会になった町が、いまもそのまま優位性をもち、国の拠点になっているのである。たとえば、フィリピンでは、スペインの到来によって都市化したそのときの状況がいまだに続いている。マニラがいぜんとしてあらゆる観点からして第一の都市で

ある。そしてイロイロ、セブがそれぞれ二位、三位をしめるわけであるが、これもスペイン支配の当時そのままである。けっきょく、植民地支配の遺産であるマニラ、イロイロ、セブという旧植民都市の優位性が、現代の国家状況においてもあたかもあたりまえであるかのごとく受けいれられている事態には興味深いものがある。

もうひとつわたしが気になるのは、「アーバン・インヴォリューション」の問題である。とりあえず、こういうことを考えてみよう。インドネシアの首都であるジャカルタは奇妙な町でありはしないか、と。ジャカルタはたしかに都市である。しかし、ジャカルタはジャワやスマトラの農村部が出店をたくさん置いているような、いわば農村代表の寄せ集めみたいな町である。その意味では、ジャカルタは植民都市的な核心に寄生するかたちでできた農村的集落のかたまりであって、擬似都市化現象をみせているといういい方もできる。

とにかく、ジャカルタの内部で生じていることはかなり複雑なのであって、その点「アーバン・インヴォリューション」という考え方は参考になる。バンコクのばあいは、どちらかというともっと都市として通りやすいかもしれないが、やはり都市風にみえながら都市ではないところつまり内部的には意外な擬似都市化現象が生じている面がなくはないのだ。そういう「アーバン・インヴォリューション」、すなわちなんらかのかたちでの「都市性」の異常化のパターンが東南アジアの各地に定着してしまっている状況を、わたしたちとしてはもっと重視すべきであろう。まして、欧米や日本の都市との類推でそれをみることは禁物である。要するに、アジア世界を都市を媒介として見ていくことは、意外にだいじなのである。〈京都大学東南アジア研究センター教授〉